

# 周斉氏のコメントに対する回答

岡本 一平

(日本 東洋大学)

はじめに、周斉氏が、拙論を限られた時間の中で精読し、コメントして下さったことに深い感謝の意を捧げたい。周氏のコメントによって、私が十分に説明していない多くのことに気づかせていただいた。その学恩に少しでも報いるために、以下に応答させていただく。周氏の質問は非常に複雑なので、便宜上、二種類に区別して応答したい。

## 第一の質問に対する応答

周氏の第一番目の質問は、仏性と三身の関係が、瑜伽行派の『撰大乘論』以降の課題であるならば、慧遠の三仏性説の意義は何か、というものである。

この質問に応答する前提として、インドにおける仏性と三身の形成に関する私の理解を簡単に述べておきたい。まず本論、第五節で記述したように、『宝性論』は、仏の三身と、三種実体、即ち法身 (dharma-kāya)、真如 (tathatā)、如来性 (gotra) の関係についてについて解説している。しかし、本来、これらは異なる文献で提示された概念である。この内、三身説の形成は未だに解明されていない部分も多いが、無著の『撰大乘論』において完成されたものと思われる。『宝性論』の三身の具体的な素材はわからないが、『撰大乘論』によって三身が確立されたのであれば、『宝性論』は『撰大乘論』以降の三身説の展開を反映していると考えられる。

このような動向の中で、慧遠の三仏性の意義について答えたい。まず、慧遠の最大の功績は、「仏」の語を限定しようと努力したことにある。註(27)で述べたように、私は、釈尊に対する敬称を離れて、「仏」あるいは「如来」の語を使用する場合、これらは比喩表現にすぎない曖昧なものと考えている。仏教において、本来、「仏」や「如来」は、釈尊を対象とする以上、仏教徒にとって至上の価値をもつ言葉、より厳密に言えば、唯一の価値あるものを指示する言葉である。しかし、釈尊から切り離して、

「仏」や「如来」を用いると、それは価値のある語であることに違いないが、釈尊という具体的な指示対象を失うので、その意味は極めて曖昧になる。例えば、一般に仏教思想は「仏教は成仏を説く教え」と規定されるが、実際「仏」とは何かを定義しなければ、意味不明な規定である。衆生は釈尊になるわけではないからである。三身説とは、そのような曖昧な「仏」の伴う語の中で、仏身に対する教義的な限定を与えたものだと、私は考える。では、仏身が三種に規定されるのであれば、仏性や如来蔵はどのようなか。慧遠の三仏性説は、そのような疑問に対する一つの解答である。仏陀に法身、報身、応身が存在すると説かれる以上、その獲得の為に必要とされる仏性もまた三種存在するのではないか。その解答の一つが慧遠の三仏性説である。無論、仏身論として三身を否定したり、あるいは、その獲得のために仏性を否定するのであれば、このような三仏性というものは必要ないだろう。

ただし、厳密に言えば、慧遠の三仏性の中心はあくまでも「法仏性」である。というのも、本論で述べたように、慧遠の三仏性の内、「応仏性」は形式的なものである（引用番号 [3] と解説参照）。従って、重要な意味をもつのは、「法仏性」と「報仏性」の二仏性の関係である。しかし、この二仏性は相互に独立したものではない。慧遠の説明によれば、「報仏性」は「法仏性」の「中」、あるいは「上」にあるものである（引用番号 [1] [2] と解説参照）。従って、「報仏性」は「法仏性」を所依とする“能依所依関係”である。このような関係は、慧遠の「法身」と「報身」の関係にも窺える。

周知のように、慧遠の三身説は、「開真合応」と「開応合真」の二種の立場がある。「開真合応」は、「真身」を「法身」と「報身」に開き、「応身」と併せて三身とする解釈（『大乘義章』「三仏義」、大正蔵 44、839 上 17 - 19）。「開応合真」は、「法身」と「報身」を併せて「真身」として、「応身」を「応身」と「化身」に開いて三身とする解釈（同、840 下 3 - 7 行）。従って、慧遠の仏身論の基礎は、「真身」と「応身」の二身説であり、「法身」と「報身」は「真身」として不可分な関係にある。この関係は、「法仏性」と「報仏性」の関係に対応している。

なぜだろうか。私の考えでは、慧遠において、三身の問題が先行し、それに対応させるために三仏性を構想したからと思われる。というのも、こ

の内「開真合応」は、菩提流支訳・伝天親菩薩造『金剛般若経論』と、その註釈『金剛仙論』に由来するからである。

『金剛般若経論』巻上（大正蔵 25、784 中 19 行）では、「応化非真仏」（応化仏は真仏ではない）という偈文を提示している。偈文では、「真仏」と「応化〔仏〕」の二仏の提示に留まるが、その直後に「法身仏」「報仏」「化仏」の三仏を説き、釈迦牟尼仏を「化仏」と規定している。しかし、ここでは二仏と三仏の関係は良く判らない。『金剛仙論』巻第三（大正蔵 25、819 中 5 行）は、この部分を「非真仏者、非是法報二種真仏也」（真仏ではない〔= 応化〕とは、法と報の二種の真仏ではないことである）と解説している。即ち、「真仏」とは「法」と「報」であり、「応化」と併せて三仏になる。この部分によって、慧遠は「開真合応」の三身を規定したと思われるので、これは三仏性とは異なり、漢訳文献に根拠のある学説である。従って、慧遠は『金剛般若経論』と『金剛仙論』を前提に「仏」を考え、それに対応させるために三仏性を構想したと思われる。

その意味では、三身を認め、その獲得に仏性を必要とする立場であれば、三仏性説は、理論的に価値があると考えられる。というのも、三身説の成立以降、多くの場合仏は三種に区別されるようになったので、「仏性」の「仏」も一義的に決定出来ない用語と考えざるを得なくなるからである。しかし、法相宗のように阿頼耶識の転依によって法身を獲得する立場や、華嚴宗のように三身ではなく、十身（十仏）を重視する立場からすれば積極的な価値は無い。また、説一切有部のように、三身を認めず、仏身の獲得を目標としない立場からも、同様に価値は認められないだろう。

因みに、「開応合真」の典拠は、真谛訳『金光明経』「三身分別品」（大正蔵 16、362 下 20 行）であり、これは前述した部分に書名が明記されている。

## 第二の質問に対する応答

周氏の第二番目の質問は、慧遠において「性」と「界」と「種姓」の関係は何か、というものである。この質問は、極めて重要な質問である。ただし、紙幅の関係上、十分には応答できない。まず、私の現在の見解を示せば、慧遠において「性」と「界」と「種姓」は同義である。「仏性」と「種姓」（慧遠の用法では「種性」）については、本文でも論じたように、

慧遠は法報の二仏性と、性種性と習種性を結合しているのので、同義と言っても不適説ではないだろう。ただし、これは「能知性」の場合であろう。「所知性」の場合、慧遠は『大乘義章』「仏性義」（大正蔵 44、472 下 22 - 23）で、「所知性者、謂、如、法性、實際、実相、法界、法住、第一義空、一実諦等」と述べている。この「所知性」の同義語リストの中に「法界」が含まれている。従って、慧遠において「所知性」は「法界」と同義である。慧遠にとって「能知性」と「所知性」の区別は重要なものである。しかし、周氏が引用された文章は極めて重要であり、その後半部分も引用すれば、「仏性者、蓋乃法界門中一門也。門別雖異。妙旨虚融。（中略）難決定論。」（大正蔵 44、472 中 17 - 19 行）である。末尾の「決定して論じることが難しい」という結論を見れば、慧遠も経論に説示される多様な「仏性」に関連する概念を理解するのに苦慮していたと思われる。

#### 周氏の最後の批評に対するコメント

私の読み方に誤りがないのであれば、周氏は質問の最後に私の文献の読み方に対して、批判的な批評をされているように思う。この点についても、周氏に深く感謝を捧げる。この批評は、第一の質問の中で、慧遠の三仏性説の価値を問いかけられたことと軌を一にしていると思われる。そこで、私が慧遠の文献を読む意味について応答しておきたい。

私は、中国における如来蔵思想について学ぶために、慧遠の文献を読んでいるのであり、如来蔵思想を支持しているから読んでいるのではない。というのも、東アジアの仏教を理解する上で、中国の如来蔵思想の解明は不可欠と考えるからである。しかし、中国、あるいは東アジアを通じて、そこで仏教を信仰していた人々が、如来蔵思想だけを価値としていたわけではない。中国の仏教徒たちの中でも、唯識やアビダルマに価値を見出していた人々もいた。その意味では、過去において、仏教に対する価値は一義的に決定できるものではない。仏教の歴史を学べば、インド以来、多様な思想を価値と見做す立場が存在したことがわかる。周氏の紹介する道宣の『統高僧伝』「釈慧遠伝」の評価もその一つである。

そして、現在においても、全ての仏教徒や仏教研究者が同一の価値観、即ち、同一の仏教観を持っているわけではない。私は、慧遠が膨大な翻訳仏典を前にして、多くの場合、誠実に対応していることを疑わない。翻訳

経論を介して、インドに根拠の無い議論をしないように努力しているからである。しかし、一方で、慧遠は、説一切有部の論書や『成実論』等から多く思想を学びながら、これらの立場を「小乗」と呼び、「大乘」より価値的に低いものと見做している。このような「大小」の区別は、慧遠だけの主張ではなく、多くの大乗を価値とする人々に共通している。しかし、近代の仏教研究の成果が示すように、これは大乘側の蔑称であり、説一切有部を含めた諸部派は、三蔵を伝承し仏説の解明に努めたのであり、特に蔑視する理由は無い。慧遠の著作を学ぶことは、私に如来蔵思想を含む多くの仏教の知識を与えてくれるので極めて有意義であり、私は一生涯学び続けたいと考える。しかし、その知識の全てが正しいとは私は考えていない。なぜならば、もしそうならば仏教を研究し思索する必要はなくなり、慧遠と同じことを繰り返せば良いことになるからである。